地域の中で育つ子ども達と家庭

静岡大学助教授　馬居　政幸

1　地域の教育力への関心は高まっているが

子どもが心身ともに健全に育つために地域の教育力の再構築が課題となって久しい。とりわけ学校５日制実施を目前にして，文部省の審議会を始め，いわゆる「受皿の問題」として，あらためて学校の外の子どもの生活の場である地域社会のあり方が論議の対象になっている。

また既に県や市町村では，社会教育行政を中心に生涯学習を推進する施策により，様々な団体や組織による地域活動を奨励し，子ども会活動や各種スポーツ団体の活性化を図っている。公民館などの社会教育施設においても，子どもを対象とする事業が組まれ，ＰＴＡを代表に社会教育関係団体でも，子どものための地域活動を独自に企画・実践しているところも多い。

学校教育においても，小学校の生活科や中学校の選択教科を代表に，新学習指導要領が告示されて以来，「開かれた学校」の理念のもと，地域の教育力を積極的に取り入れた授業や学校経営の準備が進められようとしている。

このように現状をみるとき，今後さらに地域の教育力への期待は高まり，それを具体化する運動や活動も益々活発になると思われる。しかし，多種多様な施策や地域活動が展開されることと，実際に〝地域の中で子ども達が育つ〟こととはイコールで結ばれるものであろうか。

2　混在する２つの地域観

筆者はここ数年，静岡県内の市町村で地域を基盤にした生涯学習の推進にかかわってきた。だが，筆者が直接聞く行政担当者や地域団体のリーダーの声は必ずしも楽観的ではない。いくら準備をしても参加者が少ない，という悩みを代表に，子どもの問題では受験の圧力による塾通いやファミコンに代表される遊びの変化，大人の問題ではリーダー不足（力量不足）とその背後にある親の無関心や無理解を阻害要因としてあげる方達が多い。だが，筆者はこれらを認めつつも，より根本的に現在の地域の再構築のあり方やその前提となる地域観自体に問題があると思えてならない。理由は，多様な運動や活動の中に相反する２つの課題や観方が混在している場合が少なくないからである。

一つは，地域の中から子どもの成長にとってマイナス要因となるものを取り除くことを目的とする運動や活動にみられる地域観。従来からあるポルノ自動販売機の撤去や非行防止のための地域補導，最近では有害コミックやダイヤルQ_2の問題がその典型である。この場合，地域は現状のままでは健全ではなく，〝不健全な地域〟から子どもを守ることが課題になる。

もう一つは，地域の自然，伝統文化，行事，人間関係などをプラス要因ととらえ，直接体験や社会的ルールを学ぶ場として，学校や家庭とは異なる教育力を生かす運動や活動にみられる地域観。伝統芸能の継承運動や地域ボランティア活動などが典型である。この場合，地域はそれ自体が健全な場であり，〝健全な地域〟で子どもが活躍することが課題になる。

しかし，もしこのように〝不健全な地域〟と〝健全な地域〟があり，地域の教育力は〝健全な地域〟のみにあるとすれば，〝地域の中で育つ子ども〟は，〝不健全な子ども〟と〝健全な子ども〟に二分されることになる。

あるいは，〝現にある地域〟は〝不健全〟だからこそ〝健全〟な〝あるべき地域〟を構築することが運動や活動の課題である，ということであろうか。だが，もしダイヤルQ_2のような新たな，それも日本中どこでもあてはまる不健全な問題が次々と生じてくれば，〝地域の中で育つ〟というテーマは〝あるべき地域〟の課題になり続け，その都度，〝現にある地域〟では子どもは育たない，ということになる。

なぜこのような混乱が生じるのか。本当に地域は〝健全〟と〝不健全〟に分かれるものなのか。何よりも〝地域の中で育つ子ども達〟とはどのような〝子どもの育ち〟を意味し，そのことに〝家庭〟はどのようにかかわるのか。

この疑問を解く手掛かりとして，子ども自身がとらえる地域とのかかわりをみてみたい。

3　子どもにとって地域は

次の図は，静岡県内の小学校５年から高等学校３年までの児童・生徒3610名を対象に行った調査の報告書から抜粋したものである。[1]

学校関係以外で「団体，グループ，サークル」に入っているのは，小学生では80.2%だが，中学生は12.9%，高校生は14.7%にすぎない。小学生の加入団体は「子ども会」が87.6%と圧倒的に多い。また，団体に加入していない中・高生の「理由」をみると，最も多いのが「関心がないから」で中学生が50.９%，高校生が54.８%。次いで中・高ともに「遊ぶ時間が少なくなる」と「団体を知らない」の順である。

「子ども会」は小学生のみが対象。それも静岡県内の多くの市町村では小学校に入学すればほぼ自動的に加入するシステム。子どもの自発的な選択で加入するシステムに変わると参加率はどうなるか。少なくとも，中学生の８割以上が「団体，グループ，サークル」に入っておらず，その理由も「関心がない」が最も多いとすれば，子ども会活動が卒業後積極的に他の「団体，グループ，サークル」に入って活動する動機付けにはなっていないといえよう。「遊ぶ時間が少なくなる」が５割近くいることがそのこと

図１：団体・グループ・サークル等への加入の有無(小中高別)

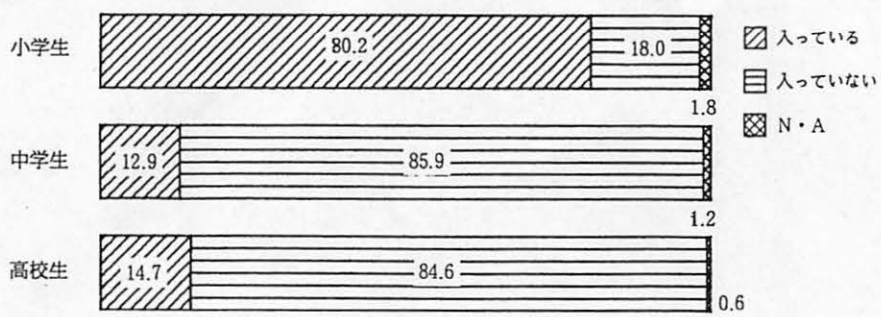


図２：加入団体の種類(小中高別)

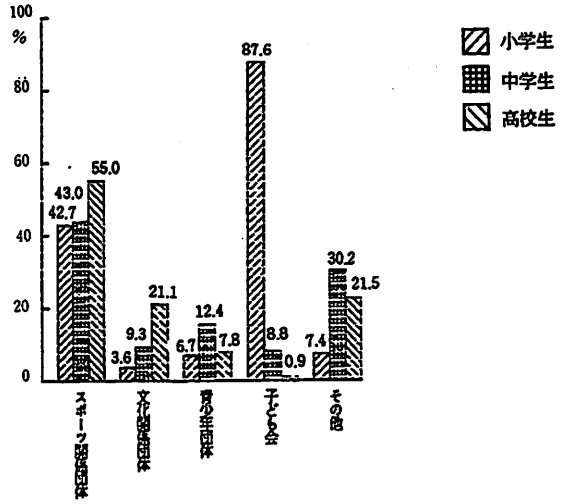


図３：団体に加入しない理由(小中高別)

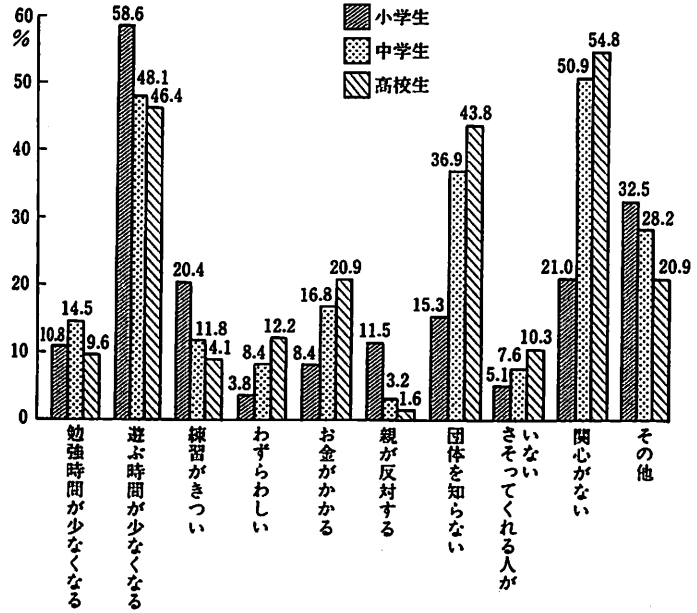
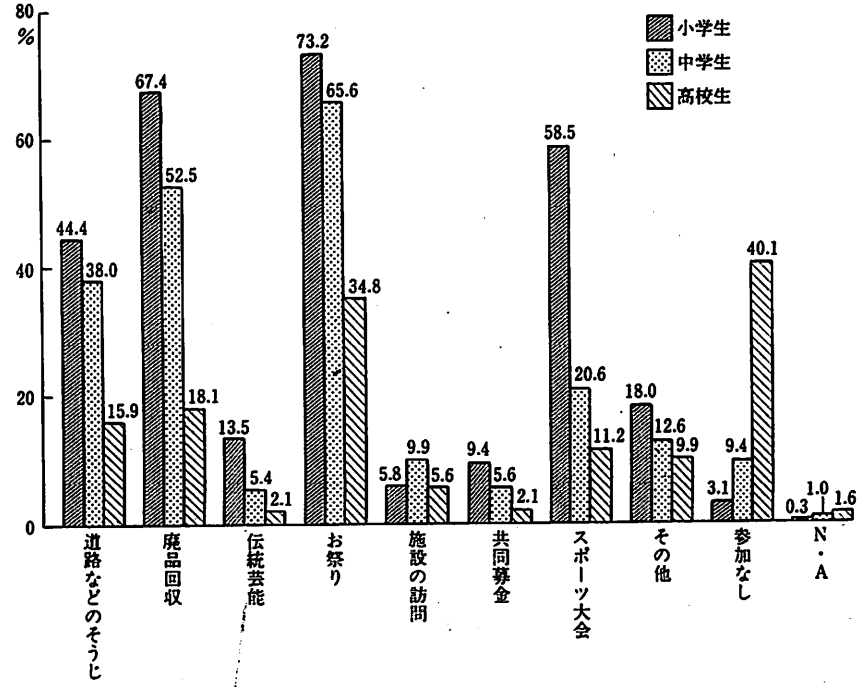


図４：地域活動への参加状況(小中高別)



を間接的に証明しているといえまいか。

他方，この１年間に，上の「地域の活動に参加している」と答えた小学生は，「お祭り」が73.2％と最も多く，「廃品回収」，「スポーツ大会」の順。中学生も「お祭り」が65.6％と多く，「廃品回収」，「道路などのそうじ」の順。だが，高校生は最も多い「お祭り」でも34.8％。以下「廃品回収」，「道路などのそうじ」の順だが，いずれも参加率は非常に低い。

中学校や高校の多くは，学校行事や生徒会の主催で「廃品回収」や「道路などのそうじ」を行う。そのため，地域の行事としての「廃品回収」や「道路などのそうじ」への中・高校生の参加率は，より少なくなると思われる。

4　地域で育つのは小学生までか

小・中・高校生の調査結果は，〝地域で育つ子ども〟とは小学生以下，あたかも中学から高校へと地域から離れることが成長の軌跡，ということを示すかのようである。特に高校生の生活の中に地域はほとんど入ってこない。だが，中学生や高校生を対象とする地域活動がないわけではない。健全育成や地域補導の対象は中・高生の場合が多いはず。ただし，いずれも〝不健全な地域〟を前提とする地域活動である。

中・高校生の地域離れが問題視され，その原因を，塾や家庭の中での受験勉強を強いる学歴社会の弊害に求める論調は多い。だが，地域活動自体が，彼らを〝地域の外で育つ〟ことを助

長（強制？）していないだろうか。

たとえば，小学生と高校生の「祭り」への参加率の差は関心の差だけではないであろう。小学生を積極的に地域の祭りに参加させる活動を進める一方で，その地域の高校では非行防止を理由に高校生の参加を禁止，ということはないか。地域の同じ行事が，小学生には〝健全〟だが高校生には〝不健全〟というわけである。

このように考えると，先に示した地域観は，〝不健全〟と〝健全〟という２つの地域があるのではなく，小学時代には〝健全な地域〟であったのが，中・高と成長するにしたがい〝不健全な地域〟になる，という意味ではないか。〝健全〟と〝不健全〟の境目は人間の発達段階で区切られ，〝地域の中で育つ〟のは小学生のような思春期以前の子ども達のみ，むしろ成長するにつれて〝地域の外で育つ〟ことが重要，ということになりはしないか。ただし，中・高生もいずれ親となる。そのとき再び地域は〝健全〟になる，ということか。しかし，一度地域に関心を失った者が，子どもを産んだからといって地域に関心をもつようになるであろうか。

先に地域のリーダーの悩みの一つに親の無関心をあげた。だが，その遠源を親が育った地域（運動や活動）のあり方自体にも求められまいか。〝地域の教育力〟は，その意図に反し，結果として地域への関心をなくす親の予備軍を育てることになっていないか。少なくとも，中・高生の地域離れは事実であり，様々な地域活動も〝不健全な地域〟観を前提とする限り，彼ら彼女らの地域離れを助長することはあっても止めることはできないであろう。

5　家庭と家庭の間（あいだ）の教育力を

〝男の子と女の子〟が〝男と女〟になるためにあがく過程，それが思春期であり，中・高生。興味は自ずと〝男と女の世界〟に向き，大人の世界への冒険を試みることもあろう。だが，地域の健全と不健全の基準が発達度ならば，健全であるために彼ら彼女らは子どもであり続けなければならない。もちろん，ポルノやダイヤルQ_2を肯定するのではない。だがその排除とともに大人へのステップをも取り除いていないだろうか。大人になるための場を〝地域の外〟に求める者が増えるのは必然かも知れない。

かつての地域の教育力とは，子どもを〝一人前〟の成員として，同質的な血縁や地縁で結びつく閉ざされた社会に同化させる事が目的。そこでの〝健全―不健全〟の基準は〝同質―異質〟により一元的に規定可能であった。だが様々な地で生まれ育った者が移り住む家庭が相互にかかわりなく並立する場になった今日の地域に，同様のことを望んでも無理。あえていえば不必要。同質的な地域を開くことにより得たのが現在の豊かさと自由で平等な社会だからである。

地域環境の悪化は規制すべきだが，それが自由平等な社会のリスクなら，〝健全―不健全〟の〝メリット―デメリット〟を学ぶための教材にする視点こそ重要ではないか。健全の基準化は不健全との対比によってのみ可能だからである。

子ども達が未来に生きる場は，より多元で異質な地であるはず。その地で異なる者と共に生きる生活者に必要なのは，一元的な〝健全―不健全〟の基準ではなく，多元的な条件から自分にとっての基準を選択する力と，選択した結果のコストを判断する力である。その力を学び取ることが，現代の〝一人前〟，すなわち一人の人間として〝自立（律）〟する条件と考える。

しかし，このような学びの場を，小さく私事化した現代の家庭のみで担うことは不可能。ただし，一組の夫婦は家庭の中では父母や祖父母だが，家庭の外では子ども達と生きる場を共有する自立した生活者であるはず。この生活者としての〝生き方〟の中から，彼らや彼女らが一人前の男と女として〝自らを律して立つ〟ためのヒントを〝自ら学びとる〟ことができるかどうかが大人へのハードル。だが，親自身が用意できる生活は一つのパターンでしかない。それに対してわが子の未来は無限に多様であるはず。

その意味で，親のなすべきことは，子どもを無菌状態に置くことではなく，わが子が生活する場で出会う多種多様な人達との間（あいだ）に，〝自立（律）を援助するコミュニケーションのネットワーク〟を創ること。これが現代の地域とその教育力の基盤であると考える。

すなわち，今日の地域の教育力は，現にある地域や地域組織自体ではなく，〝家庭と家庭の間（あいだ）〟にある様々な〝ヒト，モノ，コト〟から，わが子が〝自ら学びとる〟過程にのみ生じる。そのネットワーク創りに踏み出すために，家庭と家庭が知り合う場（知縁）を用意するのが様々な運動や活動の役割と考える。

本稿執筆中に長男（中２）が保育所で一日保父さんとして働くことを妻から聞いた。中学校が特別活動として学区の中の様々な職場や施設に依頼して行う活動とのこと。冒頭に述べたように，今，学校は大きく変わろうとしている。それを積極的に受け止め支えるためのネットワークを〝家庭と家庭の間（あいだ）〟にどれだけ創ることができるか。その過程にしか，〝一人の自立（律）した人間〟へと〝子どもを育む〟地域の教育力は創造できないと考える。

（注）

①「青少年の意識と行動に関する調査」静岡県青少年問題協議会（平成３年３月）

平成4年3月30日発行／日本教材文化研究財団／Vol.21
ISSN 0288-0245

平成3年度

研究紀要

新家庭教育の条件

'92 21

財団法人 日本教材文化研究財団

平成3年
研究紀要
第21号

●特集
新家庭教育の条件
-これからの家庭と家族と親-

■目次

巻頭言／親と子どもの教育 …… 鰺坂 二夫 2

特集Ⅰ●子どもの人間形成と家庭
・子どもにとって家庭とは …… 山村 賢明 6
・家族関係と子どもの成長 …… 藤枝 恵子 12
・家庭における親の姿 …… 荒木乳根子 18

特集Ⅱ●家庭の中の家族の役割
・家庭の中の母親の役割 …… 浜田 駒子 24
・親のライフスタイルと子どもの生活 …… 今泉 信人 28

特集Ⅲ●地域社会と家庭の連帯
・家庭・学校・地域の教育的役割の曖昧さ …… 小久保茂昭 32
・地域の中で育つ子ども達と家庭 …… 馬居 政幸 36
・地域と子どもを結ぶ家庭 …… 浜田 三雄 42

特集Ⅳ●現代社会の親と家庭教育
・都市の中の親と子ども達 …… 池田 寛 46
・共働き家庭の親と子ども …… 大野 曜 52
・長男長女の育て方 …… 松原 達哉 60

特集Ⅴ●現代社会における親の学習
・人間となるための親の学習 …… 木原健太郎 66
・両親教育と国際両親教育連盟 …… 林部 一二 70
・両親教育の学習プログラム開発 …… 岡本包治・小林公子 74

特集Ⅵ●新家庭教育の方法の開発
・家族としての子どもの役割分担 …… 松下 倶子 78
・乳幼児期の子どもを持つ親の学習 …… 萩原 元昭 84
・青少年期の子どもを持つ親の教育 …… 四宮 晟 88
■財団設立趣意書・寄附行為 …… 92
■平成2年度事業報告 …… 96
■平成3年度事業計画 …… 100
■理事会，評議員会，その他財団の活動について …… 林部 一二 104